

心理学は越境する

学習院大学 名誉教授

永田良昭 (ながた よしあき)

幕末から明治末頃の外国人の日本見聞録を分析した『逝きし世の面影』(渡辺京二, 1998)には、私の関心の中心を占める社会心理学にとっては示唆に富む見聞が少なくない。例えば、荷役、土木工事などの厳しい労働が、労働者本人には必ずしも苦役としてのみ捉えられていたわけではないと推測される見聞が記されている。今日ではどうであろうか。

総務庁(当時)が5年毎に行う「青少年の意識に関する基礎研究」の「生きがいを感じる時」への回答の中の「仕事に打ち込んでいる時」を選択した有職回答者の比率は、1970年は46.3%であるが、1990年には30.3%まで下降している。心理学の教科書にはときに価値観や生活態度が時代とともに変化する様子が記載されている。しかし、その変化が時代相のどのような側面と関わりを持つかを示唆する仮説はまず提示されていない。一部の研究者による心理史、社会心理史の試みにはこの種の問題を解明する目的があったと思われるが発育不良と云うしかない。

この種の試みでは、学際的な共同作業が必要になる。しかし、例えばいわゆる歴史家の着目する時代相とは異なる視点で時代を読む必要も生じるかもしれない。ここで期待される学際研究では、心理学も含めて関係領域の既知の知見を持ち寄ることではなく、異分野の専門家が問題を共有し、共有された問題に接近する各分野の視点、方法、過去の蓄積が問題解決に資するかどうかの検討から始めることが期待されると思う。

こうした関心から、現在も毎年開催される二千年の歴史をもつと伝えられる能登の唐戸山神事相撲会に目がとまった。羽昨を基準とし、下山といわれる能登側と上山といわれる加賀・越中側の代表の間で行われる結びの大関(優勝者)決定戦で、筆者が見たところではもみ合いの途中で「ものいい」がつくと審判団の判定も待たずに大関候補者の応援団がそれぞれの候補者を担ぎあげて羽昨神社に勝利の報告のために走りだした。大関が、2名誕生する。明治11年以降の記録しかないのが残念であるが、明治11年から明治24年までは15、18年を除くと大関は下山か上山のどちらか1名が記録されている。その後は明治36年を除くと、大関は下山、上山各1名、あわせて2名が記録されている。2人大関制は古くからの伝承ではない。紆余曲折を経て大関2名制が定着したことを伺わせる。当時の能登周辺の人々の移動、産業や通商圏の変化などと2人大関制の成立過程が関係するかどうか検討の意義はないであろうか。



Profile—永田良昭

1959年、京都大学文学部哲学科心理学専攻卒業。1964年、京都大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。文学博士(京都大学)。鉄道労働科学研究所研究員、京都大学文学部助手、大阪女子大学学芸学部助教授、学習院大学文学部助教授、教授、学長、日本社会心理学会会長を歴任。専門は社会心理学。著書は『集団行動の心理学』(共編著、有斐閣)、『人の社会性とは何か』(ミネルヴァ書房)、『現代社会を社会心理学で読む』(共編著、ナカニシヤ出版)、『環境心理学序説』(訳、新曜社)、『心理学とは何なのか』(中公新書)など。